『伝えるべき言葉』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

患者さんが今まさに亡くならんとする瞬間に立ち会う機会は、医者であっても実はそんなにしょっちゅうあるわけではありません。年間に何十人もの方の死亡確認をしている私ですら、そうです。ましてや一般の方が人の亡くなる瞬間に立ち会うことは、ほとんどの人が病院で亡くなる今の時代にあっては、一生に一度あるかどうか位の稀な経験かもしれません。

人はどんな風に亡くなっていくのでしょうか？血管が詰まったり破れたりして突然に死を迎える場合を除けば、最後の数日間から数週間は意識が低下したり、失われたりするのが普通です。いまわの際に、自分を取り囲む人たちに向かってかすれた声で途切れ途切れに最後の言葉を語り終えた直後に、ガクッと頭を垂れて命を終える…ドラマなどではよくある光景ですが、実際にそんな風に亡くなっていかれる人は、ほとんどいません。したがって、今回はかなり稀なケースであることをあらかじめお断りしておきます。

60代のOさんは、2年余り癌の治療を続けてきましたが、今や余命いくばくもない状況であり、本人もそのことは十分に承知していました。Oさんは、妻や入院している病院の看護師に対して、「家に帰らせてくれ。最後は家で死にたいんだ」と根気強く訴え続け、自分も病気を抱えている身である妻は、夫の最後の願いを叶えてあげたい一心で、不安な気持ちは残しつつも、自宅への退院を承諾しました。退院調整看護師や医療相談員が調整をし、退院に向けてのカンファランスが開かれることになり、Oさん夫婦を取り囲み、所狭しと10名以上の関係者がOさんの病室に集まり、様々な問題をクリアするための意見を交わしました。

率直に申し上げて、Oさんのご一家は、たいへん貧しい生活をして来られました。今にも朽ち果ててしまいそうな佇まいのその家は、それでもOさんにとっては他のどことも比べようのない場所です。我が家に勝る場所など、この地上には存在しません。Oさんの満足気な表情は、そのことを雄弁に物語っていました。「この人のせいで本当にずーっと貧乏で、苦労させられたんですよー！」という妻の言葉を、Oさんは心地よい音楽でも聴いているかのような表情で聞いておられました。憎まれ口を叩く妻がすぐ傍にいる「我が家」という日常の中にようやく戻ってこれた安堵感の中で、Oさんは心から寛いでいるように見えました。

初めての訪問からちょうど1週間目の日、隣町にいた私の携帯が鳴りました。認知症の患者さんが大暴れして流血騒ぎとなり、私を含めた関係者による緊急の対応がちょうど終わろうとしていた時でした。Oさんの妻の切迫した様子から状況を察した私は、急いでその場を辞し、Oさん宅に向かいました。

Oさんは既に亡くなる直前の息遣いです。妻は、両方の手でしっかりと夫の右手を握りしめています。私が、「Oさん！」と呼びかけると、涙をためたOさんの目は私の方に向けられ、私と視点が合いました。Oさんの眼差しは、自身が置かれている状況を十分に理解していることを示していました。私はうなずき、「間もなくですね。言ってあげたい言葉をかけてあげてください」と妻に伝えました。「ありがとうね！お父さん、ありがとうね！もうがんばらなくていいよ！私の顔を覚えていてね！覚えていてね！」妻は、一生懸命に、繰り返し夫に話しかけます。息をする間隔が間延びしてきた夫の手を握りながら、Oさんの奥さんは、隣にいる私の方に顔を向け、私の目をしっかりと見て、断言するように言われました。「最後にね、『愛してる』って言ってくれたの。何度も、何度も、言ってくれたの。『愛してる』って。」万感の思いが込められたその言葉を、私も目を反らさずにしっかりと受け止めました。間もなくOさんの呼吸は止まり、しばらく待っても再開することはありませんでした。私がOさん宅に到着してから、わずか10分間ほどの間の出来事でした。

最初にも書きましたように、最後までこんな風に意識がある人は稀です。ましてや、最後の最後になってから、こんな風に大切な人に大事な言葉を伝えることができる人は極めて稀です。しかし、私たち日本人はどちらかというと苦手ですが、言葉にして伝えるというのは、やはり大事なことです。大切な人に伝えておきたいことは、思いついた時に早めに伝えておいた方がいいのです。…そう言えば、折しも今日は私の妻の誕生日でしたが...なかなか難しいですよね。